

おわりに

各大学においては、教育の質保証を実質化する動きが加速的に進み、各種研究会等において、さまざまな工夫された取り組みの成果報告が行われ、それぞれの大学が自校の文化・風土に合った環境づくりに取り組むという流れが定着してきたように感じられる。このような流れとともに、これまで大学が正面から向き合うことに距離を置いてきた“大学マネジメント”の仕組みも教育の質保証に向けた取り組みとあわせて、大きく流れが変わろうとしている。これらの動きを実質化するための機能のひとつとして、IRの取り組みも活発化してきた。

大学評価コンソーシアムは、このような時代の流れを的確に捉え、大学評価文化の醸成、大学間の連携、協力を通じて大学経営の改善・充実に役立つ大学評価の実現に貢献することを目的として生まれた“大学評価に関する実務的側面からのアプローチ”を基軸としたコミュニティである。最近では、教育の質保証を実質化するためのツール開発、知識、技術の修得を目指し、IRをテーマとして位置づけ、さまざまな学びの場を提供してきた。

今回の企画である「数量データ分析に関する勉強会」は、参加者の多くが日常的に大学教育・大学運営の改善に力を注いでいる大学職員であった。大学における教育の質保証の担い手は、教職員だけではなく、大学職員はそれを支える立場として、日々の業務に取り組んでいる。評価に関する業務は、教員と職員が協働して行う融合的な営みである。データの収集、分析、解釈、改善計画の立案・実行・評価・改善の流れの中で、その組織運営マネジメントを支えるのは大学職員が得意とする領域である。今回の学びの機会は“データの活用”に主眼を置いたものであったが、この学びを通じて、IRの営みにおいては、「データが語る（語っている）」ことを前面に出して、わかりやすく表現された信頼性の高いデータを送り届けることが重要であること、そして、「データについての共有者を増やし、データの価値を高めていく」ということへの理解を深める機会にもなったと考えている。このようなマインドを持って大学運営を支えていくのが、大学職員に求められる使命であろう。

大学の営みに対する解釈は、学生、教職員、社会と多面的な視点で行われている。教育の営みを示すデータ・情報を駆使して、それぞれの立場を一にして、対話ができるようにすることも将来的な評価の取り組みの一部になってくると思われる。まずは、その場をいかにしてつくり上げていくかという段階で、IRの機能が活かされてくのではないかと考えられる。

まだまだ、数量データですべての大学の営みを語ることは難しいと思われるが、大学の存在意義を自ら積極的に示す指標開発の取り組みが必要になってくるだろう。そのために学んでおくことは、問題点に対して「問いを立てる力」である。「問いを立てる力」は、まず、自らの業務を理解し、諸課題を認識するというどのような場面においても必要とされる基礎的素養である。その力を身につけるためには、①日常業務の中で感ずる疑問や課題に対して強い改善意識を持つこと、②大学の内部環境・外部環境の動向に関心を持つことである。

そして、次の段階では、課題解決に向けて、組織としての意思決定を行うことになるが、どのような調査・分析（収集すべきデータ、分析手法の検討）を行うのか、組織の風土・文化も考慮し、効果的な意思決定を支援する手法を確立させていくことが重要であると考えられる。

今後の大学評価コンソーシアムの諸活動においては、大学の教育研究諸活動の可視化を実現するための能力開発にも注力して、より実践的な知識と技術、そして経験を積むことができる場として、活動を進めていきたい。

平成 25 年 12 月 13 日

大学評価コンソーシアム 幹事

(名城大学 薬学部・薬学研究科事務室 事務長)

難波 輝吉